うちのイチ押し!

大阪市立自然史博物館　第49回特別展

「きのこ！キノコ！木の子！～きのこから眺める自然と暮らし～」

を開催します

【開催期間】7/21(土)～10/21(日)　9:30～17:00(入館は16:30まで)

カラフルなきのこ、かわった形のきのこ、突然現れるきのこ、ちょっと怖い毒きのこ。「きのこ」は学校では教えてもらえない、不思議な生き物として多くの人々の興味を誘う存在です。また、モチーフとしても様々なグッズやデザインに用いられる愛される生き物でもあります。

また、きのこは食文化の中にもしっかり根ざしてきました。かつて、蹴飛ばすほど取れたと言われ、今は絶滅危惧種とされるマツタケ。アカマツと共生するマツタケは、薪や草を刈っていた痩せた山によく生えたといいます。和食のうま味の重要な要素であるシイタケも、本来は暖地に生えるシイノキの枯れ木から生える野生のきのこでした。これが明治に広がったクヌギの生産とともに各地で栽培されるようになりました。大阪の海岸の松林で取られた松露(ショウロ)、やはり松林の濕地(シメジ)。東北や信州で野生のきのこの食文化がなぜ豊かで、そしてなぜ失われつつあるのか。きのこからは、その向こうに地域の自然や暮らしが見えてきます。

こうしたきのこを、フリーズドライ標本、精密な絵画、先人の研究などを通してじっくり学び、楽しみ、鑑賞できる特別展になります。きのこを通して、「里山」と呼ばれる身近に利用してきた山林の自然についても理解を深めることができるよう工夫をこらしています。

[展示構成]
〈菌類フリーズドライ標本〉
〈本郷次雄菌類図鑑〉　ほか

「イボテングタケ」標本

「チャタマゴタケ」水彩画

「小島明彦氏の彫刻作品」photo by janny suzuki

会場・観覧料等はＰ11をご確認ください。　問合 ☎6697-6221

おおさか歴史探訪 125

大阪の史跡や歴史資料を毎号連続でご紹介します。

北村兼子(かねこ)ゆかりの地　― 空飛ぶ清少納言の生涯 ―

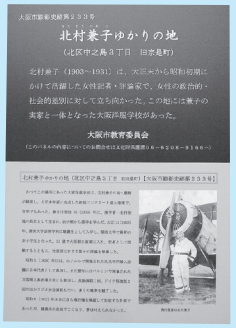
北区中之島三丁目は「北村兼子」の実家のあったところです、と紹介して、だれ？と思う方もいるでしょう。しかし、大阪で生まれ育ち、『女たちの20世紀・100人』という本にも樋口一葉・与謝野晶子らとともに紹介されている人物です。

兼子は漢学者・北村佳逸(かいつ)の長女として明治36(1903)年、天満に生まれ、中之島小学校から梅田高女、大阪外語英語科、関西大学ドイツ法律科に進み、関西大学で最初の女子学生となりました。22歳で大阪朝日新聞に入社し、記者として活動するとともに性差別に対する数々の評論を執筆し、当時「現代の清少納言」とまで言われました。

昭和３(1928)年には、24歳という若さでホノルルで開かれた汎太平洋婦人会議に日本代表として参加、翌年にはベルリンで開催された万国婦人参政権大会にも参加し、英語演説１回、ドイツ語演説２回のほかラジオでも演説し多くの聴衆を魅了しました。そして昭和６(1931)年８月には、三菱航空機に発注した飛行機を自ら操縦し訪欧旅行を決行する計画でしたが、その前月に腹膜炎が原因で亡くなり、大望を叶えることができませんでした。

遺著『大空に飛ぶ』には「人間の外出には靴をはく代わりに肩の上に軽い航空機を載せて飛んでいく」ようになるだろうと未来への夢想も語られています。大正～昭和の初めという時代に、女性の政治的・社会的差別に対して立ち向かった若きジャーナリストのいたことを大阪市民にはぜひ知っておいてほしいと思います。

（大阪市教育委員会　文化財保護課）



中之島第一ビル正面にある顕彰パネル

顕彰パネルより飛行服姿の北村兼子